

同窓生の広場

上高地・焼岳・西穂高岳登山

相上 興信

当時の大学受験は、きわめてきびしい時であった。競争率が高く、浪人する者も多い時代であった。高校時代はいろいろな分野で部活動に携って活動してきており、それぞれの特色を持つ人たちである。

ここに集った四人は入学以来気の合うメンバーである。これから我々ほどのような活動をするか話し合い、山登りがよいという発言があり、登山を実行することに意見が一致した。小川と井上はバドミントン部で、渡辺は水泳部で相上はテニス部である。四名は、それぞれ健康、強じんであり活動的で動きがよかった。会の名は、「登山の会」とした。数回の会合を重ねて、今後の日程を決め年一回の山行きの計画ができ、一回目は、上高地・焼岳・西穂高岳と決定した。

大正池は焼岳の噴火により、一九一五年に梓川がせき止められた池である。上高地より出発し、立ち枯れた木々がたえずむ大正池には、目の前の穂高連峰やこれから目ざす焼岳が水面に映り、それに穂高岳が映り、見事な景観である。一九六二年、再びの爆発では、中原小屋が全壊している。警戒レベルの大変高い山である。その日は頂上の北峰には立ち寄ることは出来なかった。

この後は、西穂高岳へ縦走をはじめた。天候は、この時間まで良好であったが、あつという間に雲が湧き出し、天気が急激に変化し、雨が降り出し、その勢いは、壮烈なものになった。雷雨となつて勢いはさらに強く、雷鳴は轟き、背面のリュックは、ビショビショになり、西穂高岳尾根では、大きな岩影にかくれ、一時間ぐらいにわたり、動きがとれなかった。様子を見て、これからの前進は不可能と考え、西穂高岳の縦走は断念した。上から滝のように打ちつけてくる雨、下から突き上げてくる雨はかなり強く、顔には痛い雨であった。下山も雨のため、きわめてむずかしく、困難をきわめた。

縦走の下山の反省から学ぶということになる、これからは、丈夫で高性能な装備をさらに高め、あらゆる気象環境の中でも耐え得ることが必要であると痛感した。悪天候に登山を行うのは、大きな危険がともなうのであり、どんな気候、環境にも対応できる準備を考えなくてはならないという反省の念につきる。

成功の道は、道具の選び方が大変重要であり、反省させられた。危機的状況下に対応できる、安心安全を担保する事前準備がいかに大切かを知る山行きであった。

(昭和三十六年卒)

蒼玄寮の思い出

比留間 英雄

今から六十年以上も前の学生時代を、ふと思い出すことがある。

現在の北浦和公園の地はかつて文理学部敷地であったが、少し離れた所に男子の蒼玄寮があった。私は蒼玄寮での生活が最も深く心に残っている。

寮は古い木造の二階建てで、冷暖房設備も電気洗濯機も浴室もなかった。ただ狭い娛樂室に、藤岡学長が寄贈してくれたテレビが一台置かれていた。

この寮に年齢も学部も出身地も異なる、三百名余りが生活していたのである。ひたすら勉学に励む人、サークル活動に精を出す人、学生運動に奔走する人：それはそれは、いろいろな人がいた。

私は身近にこれ程多くの人と接したのは、初めてであった。推されて寮長を務めてからは、さらに多くの人を知ることになった。

大学が大久保に移転することに伴い、新しい寮について学生部長のご自宅へお伺いしたこともある。

寮は一室四人が大半年で、年に一度部屋替えがある。希望する人と同室にもなれたが、初めて出会う人が殆どである。私は生涯の友と

なるT君と出会うことができた。

時代は高度経済成長の前で、総じて生活は貧しかった。学資の足しにするため、アルバイトに追われる人も少なくなかった。

物は乏しくとも、この寮生活は活気があり、毎日が充実していた。中でも、皆で取り組んだ寮祭は盛大で楽しいイベントであった。この日限りは、別所沼近くの女子の悠元寮を訪れることもできた。

庄巻は、最終日にグラウンドで行うキャンプファイヤーである。積み上げた廃材の炎を囲み、肩を組みながら寮歌を歌ったものだ。ああ六寮に秋たけて、雨蕭蕭と音もなし：今も寮歌は忘れない。あの時に一緒だった喜界島出身のO君、花巻市出身のKさん：今はどうしているだろうか。

この蒼玄寮の生活は、私の人生でこの上ない貴重な経験であった。今も大切な心の糧になっている。

過日大学に問い合わせたら、大久保校舎の学生寮は学生宿舎に変わっていた。

名は消えても、「蒼玄寮」は、私の心に深く刻まれている。

(昭和四十一年卒)



埼玉大学当時の思い出

蜂須 栄

教職に就いて定年までの三十八年間、紆余曲折を経ながらも充実して過ごすことができました。その間、教頭や校長に加え県教育局にも勤務し、市教育長や教育事務所長をも務めさせていただきました。お導きいただいた多くの方々に深く感謝いたします。今振り返るに、教職を貫く柱は大学時代に培われたように感じております。私は、中学校の美術教員でした。埼玉大では教育学部中学校課程美術科で学びました。しかし、身の程知らずにも第一志望は他の教科で受験したのです。志願書の下段に第二志望の記入欄があり、美術が好きだったので、とりあえず美術と記入しました。卒業時に教授から「蜂須よ、よく頑張ったな。第二志望者は途中で挫ける者が多いので採るのを躊躇したが。」と言われ、目頭を熱くしたものです。美術科の入試は「石膏デッサン」が課せられていました。私のデッサンは、画面から左肩が大きくはみ出し、右側は画面の三分の一もが空いていました。どう見ても絵の力は合格した仲間の中で最下位です。最初は希望の教科ではないので、絵画の授業にも力が入りません。が、仲間の熱心な姿に影響され、次第にビリから抜け出さなければと思うようになりました。

やっと真剣に取り組み始めたころ、父が胃癌に罹り、全摘出の大手術を受けました。当時、常に三十頭を搾乳する酪農を営んでおりましたが、父は当然重労働には従事できません。母を中心に弟妹と家族全員で家業に取り組みこととなりました。弟は都内の高校に通いながら牛舎に入り、妹は専ら食事担当です。長男の私は、家業を継続し、弟妹の学業を維持するために大学退学もやむなしと覚悟しました。幸いに父母から、全員で頑張れば退学の要なし、と励まされ退学は避けられました。早朝に起きて牛舎に入り、大学からは講義が終了次第バスに飛び乗る毎日です。真夏などは、太陽が傾き始める頃、仲間はやつと絵に向かうのですが、私はそれを尻目に牛舎に急ぎました。勢い、許された時間には全力で画面に没頭します。

卒業制作で描いた人物画をその年の埼玉県展に出品したところ、なんと特選入選したのです。埼玉新聞の一面に私の着慣れないスーツ姿が載りました。ビリからの脱出です。

私の埼玉大時代の取り組みは、絵画の技量向上以上に、大きなものをもたらしたと振り返っております。それが、教職三十八年間の大きな充実を支えてくれたと、絵と牛に、今更に感謝しております。

(昭和四十四年卒)

私の命

龍口 喜子

私は、戦後生まれです。戦前と戦後の時代が重なり、混沌とした中で私は生まれました。

我が家は、町の小さな自動車の修理販売をする工場を営んでいました。私が小学生の頃、父は夏の暑い日、上半身裸で汗をかきながら、自動車を修理していました。私は、父にシャツを着てほしいと思っていました。それは父の背中ではデコボコで穴が開いているように、人に見られたくないと思っていました。のちに、母から戦地で焼夷弾が破裂して、その破片が父の背中に刺さったのだと聞きました。父は背中痛みや苦しみを抱え、日本に帰ることができました。父の頑張りで、私がこの世に生を受けることができたのだと思えました。

毎年八月十四日の晩、実家に家族がみんな集まった時、母はよく「今頃は、あの辺を走っていたね。」と話し出しました。(熊谷が焼け野原になったのは、終戦の日の明け方、太平洋戦争最後の空襲でした。)爆弾が雨のように降ってきて、周りが火の海になり、その中を逃げまどっている途中、星川にさしかかると、川には水がありません。人々が川に入っていたそうです。母は姉と兄の三人で川に入っ

ていきました。水面がちようど兄の口元だったので、母は「この子が溺れてしまう」と思い、星川から出て東小学校の裏の方に逃げたのだと言っていました。明け方、飛行機の音も聞こえなくなったので、避難した先から家に戻ろうと燃えている家や倒れている電信柱を避けながら、星川にさしかかりました。そこで目にしたのは、無残に川に浮いているたくさんの人でした。星川の川べりの家が燃え、川に入った人たちは、逃げる場所を塞がれてしまったのだと。兄の背がもう少し高かったら、川の中で最期を遂げた人たちと同じ運命だったと母は語っていました。(毎年、熊谷の星川では慰霊の灯籠流しが行われています。)

本当に生と死は、紙一重だと思えます。この話を聞かされた時に、窮地をくぐり抜けてきた父と母があり、私が生を受けることができたとしみじみ思います。

今の世界情勢の中で、いつ自分の身にも悲惨な状況がくるかわからない時代です。そう思っているも、自分から発信する力のなさをもどかしく感じています。平和を祈ることしかできない自分でも、人の心のありようを変えていくこともできるのではないかと。何も背負っていない私だから好き勝手なことが言えるのでしょうか。

(昭和四十五年卒)

振り返ってみると

渡邊 よしみ

私が大学に入学したのは、五十年以上も前のことになりました。過ぎ去った年月のあまりの長さ、戸惑うばかりです。

大学進学の際、明治生まれの祖母が、「女性も、手に職をつけなければ」と、口癖のように言っていたからです。その言葉どおり、大学生となって、就職に就くための一歩を踏み出しました。当時、学生の自分は、勉強をするにと考えていましたが、身の回りに起こる社会事象にも、心を動かされました。大学紛争の激化、三億円強奪事件、アポロ十一号月面着陸、日本万国博覧会、三島由紀夫自裁、札幌オリンピック開催など、リアルタイムで体験することができました。その他、旅行、読書、音楽、ファッションにも興味を引かれ、関心を寄せていきました。それぞれの分野には、大学の講義とは違った感動があり、物事を考える視野を広げることができました。大学生活は、行動範囲も広がり、エネルギーに動き回りましたが、大過なく、平凡に過ぎていったように思います。

教員採用試験に合格し、小学校の教員になりました。最初は一年生の担任です。子供達は、とても愛らしく、毎日、学校に通うのが

楽しみでした。授業をしたり、一緒に遊んだり、幼い頃の学校ごっこを再現しているような気がしたものです。知識も技術も見識も不十分でしたが、早く一人前の教師になりたいと、無我夢中で過ごしました。先輩の先生から、「子供や保護者の前で、不安な様子や自信のない態度は、決して見せないこと」と、アドバイスをいただきました。「実力をつけ、信頼される教師になること」と理解し、肝に銘じました。

ある時期、子供に学ぶ喜びを味わわせる学習指導について、校内研修を続けたことがあります。子供達に、勉強がもしろいと言われたとき、私自身が、学ぶ喜びを味わうことができたことと気がしました。この経験が、教師としての自信をつけてくれました。

三十八年間の教師生活の中では、仕事と家庭の両立に苦慮したこともありましたが、仕事を辞める気持ちは、湧いてきませんでした。教師の仕事が好きだったことと、子供の成長に関われることがうれしく、自分の喜びとして感じることができたからです。

振り返ってみると、これまでの体験や経験、その時々感情が、今の私に集約されています。そう考えると、無駄なことは、何一つなかったのだと思えます。

(昭和四十七年卒)

教職の道 人とかかわりの中で

梅山 健司

模試後の高校のベランダで、空を見上げながら級友らと話していた。アポロ十一号が、人類の夢を乗せて月に着陸したという時、自分達はまだ将来の夢さえ描けていない。これでいいのかなど。そんな中、N君が「教師になりたい。」と言った。これまでも何度も聞いていたが、この時はなぜか心に刺さった。教師が私の夢となった瞬間だった。彼の言葉が、教師への道の第一歩を進めてくれた。

期待と不安の中で大学生活が始まった。しかし、不安はすぐに解消された。一期一会を信条とする年上の級友たちが中心となり、クラスをまとめてくれたのだ。教養棟や学生寮の一角によく集まった。クラス新聞を発行したり、秩父の大学寮に泊まったり、山手線一周ハイク、東北へのドライブ旅行、ハードなバイトも一緒にした。

サークルでも、よき先輩や同級生に恵まれた。クラスもサークルも、卒業後半世紀の今も、同窓会・OB会を開いている。教友会の退職時期同窓会では、三分の一が、クラスとサークルの仲間であった。卒業後、赴任したK校は、市内東端にある新設校であった。全てを新たに創り上げていくことのできる学校だった。その後も新たに

着任した若い教員の力を結集し、先輩の支えのもと、新たな取り組みに挑戦していった。三年目には市の研究委嘱校になった。後年、異動先の学校を訪れた教育長が、校長に「光は東からと言うが、本市においても、中心校以外でも委嘱研究ができるようになったのはK校のお蔭だよ。」と語るのを聞き、とても誇らしく感じたものだ。

子供達との思い出は、数えきれない。今でも、誰かが一声かければ、集まってくる教え子がいるというのも教師冥利に尽きる。管理職にあっても、良き仲間が多いことは心強いものである。学校経営上の困難な問題も、豊かな経験と知識に裏付けされた助言を受け、解決することができた。

教職生活を振り返ると、教師の道へと背中を押してくれた友、人間の幅を広げてくれた学友、教師としての力を育んでくれた先生方、そして生きがいにくれた子供達。多くの出会いにより豊かな人生を歩ませていただいたことに感謝。

生成AIやデジタル化の時代だからこそ、教育は、人と人との直のふれあいによってこそ成り立つという原点を忘れてはならない。埼玉大生にも若い先生方にも、多くの人との関わりを大切に、子供達のために、豊かな人間性や指導力、使命感を高めていっていただきたい。

(昭和五十年卒)

これまで そいつ これから

内田 美智子

私が埼玉大学を卒業した昭和五十三年頃は、教育学部の学生はほぼ全員が教職に就く時代でした。中学校が荒れていた頃で、何とか生徒の心を変化させよう、合唱を通して心を育もうと取り組んでいました。そんな中、主人の仕事を手伝うため、十八年間の音楽教師にピリオドを打ちました。

昼間スーパードに行くのと、あらあこんなにも沢山の人が買物物にきているのねと、知らなかった世界がとても新鮮に映ったものです。子供の受験、親の介護、仕事、趣味等忙しく充実した日々でした。主人の膀胱癌のことを除いては。かろうじて手術はでき、六年間頑張りましたが、六十六歳で永眠。幸いだったのは、主人が自分の両親を見送れたこと、初孫を抱くことができたことです。その後、二男、三男も結婚し、親の役目をようやくやく終えることができました。ほっと一息した頃、音楽療法のボランティアに参加しました。デイサービスの方々と懐メロを歌った時、とても幸せな気持ちになりました。歌うことから遠ざかってからは、歌うことから遠ざかっていきましたが、振り返ると、自分は歌うことで色々なストレスを解消してきていた、歌わないと元気が出

ないんだと実感しました。

私にも、こういう活動ならお役に立つことができるのではないかと、教師の経験も活かすことができるのではないかと思ひ、音楽療法、認知症のこと、介護のこと、色々な学んでみました。そして、歌唱療法士、嚙下トレーニンング協会認定講師の資格を取得しました。

今現在、「歌って若返り教室」や「歌声サークル」を開催しています。歌いながら手遊び等をして脳を活性化させる、表情筋を鍛えて滑舌をよくする、歌うことで喉の筋肉を使って誤嚥防止、大きな声で歌いストレス発散等、歌うことは、健康になることに繋がります。懐かしい歌を歌いながら、その時代のことを色々思い出すことも回想法と言って、認知症予防に効果があります。この活動を始めてから、色々な方々と出会い、刺激され、パワーをいただき、毎日穏やかな気持ちで過ごせるようになりました。

人生百年と言われますが、もたもたしている間に季節も時間も人生も過ぎ去って行ってしまうものです。「使わない機能は退化する」「健康に長生きしたければ、一日一曲歌いなさい」これからもずっと、歌で人と繋がれることに喜びを感じてまいります。

歌って元気！ 歌って健康！

(昭和五十三年卒)

校歌なき応援団(空前絶後の神宮球場)

長谷川 博

昭和五十四年、初夏。埼玉大学は、全日本大学野球選手権大会に出場しました。これは、聖地神宮球場で行われる大学野球界最高の大会であり、非常に重要なタイトルです。埼玉大学がこの大会に出場できたのは、四番打者でエースだった佐藤明広選手と、二級上の内田道雄監督という名将のおかげです。埼玉大学にとっては、現在に至るまで空前絶後の快挙です。

対戦相手は、九州の強豪校である八幡大学(現在の九州国際大学)でした。この学校には常設の応援団があり、彼らには試合を盛り上げる準備が整っていました。一方、当時の埼玉大学には校歌も応援団もなく、先輩である内田監督の依頼を受けた私は、臨時の応援団長を務めることになりました。

試合前に、私は八幡大学の応援団幹部と打ち合わせ、校歌斉唱とエールの交換を一回、七回、試合終了後に行うことになりました。ところが、当時の埼玉大学にはそもそも校歌が存在しません。この困難に直面し、私は応援席を見回しました。そこには、立教、明治、中央、学芸、千葉など、異なる大学に在籍する学生が見受けられましたが、彼らには共通点がありました。それは、佐藤選手や内田監

督と同じ春日部高校の出身者であったことです。

実は私は、春日部高校応援指導部の出身で佐藤選手らを応援してきました。覚悟を決めた私は、数人の同窓生を呼び寄せ、校歌や応援歌をすべて春日部高校のものでやると伝えました。そして、周りの学生をリードしてもらおうようお願いしました。幸い、春日部高校の校歌には「春日部」や「八木崎」などの地名が入っていないため、違和感なく「埼玉大学の校歌」として歌うことができました。

埼玉大学の応援席には、約三百名の学生が集まっていたのですが、そのうち数十名が春日部高校の出身者でした。そのため、彼らの大きな歌声が神宮球場に響き渡り、「埼玉大学の校歌」として披露されました。この瞬間、まさに高校の校歌が大学の大会で歌われるという、奇跡が生まれたのです。半世紀近くも前のことですが、神宮球場がそれを覚えていきます。

現在では、埼玉大学に正式な校歌(埼玉大学大学歌)が存在しませんが、次回の出場時には、こちらが歌われることでしょうか。しかし、あの昭和五十四年の大会で、高校の校歌が大学の大会で斉唱されたことは、間違いなく空前絶後の出来事であり、二度と起こらないことだと確信しております。

(昭和五十六年卒)

思索する身体を

櫛引 千恵

この夏に「教師教育のグランドデザイン」という講演を聴く機会がありました。この講演で、私の耳に留まったのは、「思索する身体」という言葉でした。私は、この言葉を次のように捉えました。

「教師の適性としてなくてはならない要素に、学問的知識・技能・思索する習慣、実践経験が挙げられる。思索する習慣は、知識・技能を深めるためにも、実践を支えるためにも、必要不可欠である。

教師は、何が教育的によいかわるいのかを日々考え、判断しなければならぬ。しかも『答え』は時と場合によって異なり、それが『正解』かどうかを確認することも困難なことが多い。

だからこそ、思索が習慣化し、意識や努力の感覚なしに、思索することが身体化までしている『思索する身体』が必須なのである。大学の役割の一つは、この『思索する身体』を培うことである。

さて、私の大学生活はと、咄嗟に自問自答しました。「思索する身体」までは至らなかつたものの、思索の種をたくさんいただいたと感謝せずにはいられません。

その種の一つが、発達心理学のテキストであった、岡本夏木氏の『子どもとことば』（一九八二年）

という本です。当時は、その内容について、差し迫った問いも課題も貧弱で、とても受け身な読者であり、学び手でありました。

しかし、卒業後、何度か引越越しを繰り返しましたが、その度にこの本は私の本棚に置かれ、その後、出版された『ことばと発達』（一九八五年）と『幼児期』（二〇〇五年）と共に、教師として、母親としての私に、知恵と思索の機会を与えてくれました。

ここに来て、小学校一年生の担任が連続八回という私は、幼児期と学童期の接続を考えるために、『幼児期』を読み返しました。この本は、岡本氏が何と七十九歳の時の著作で、社会の情報化と能力主義により、幼児期が空洞化していること、幼児期を再建することが緊急な課題であり、そのためにということが畳みかけるように述べられています。私は、その勢いに圧倒されつつ、思索し探究し発信し続ける岡本氏を想い、私もそうでありたいと思いました。

学び続けていると、学び続けている人との出会いがあります。その出会いにより「思索する身体」が鍛えられます。今後、社会がどのように変化していくのか、変化の中でどう教育に向かっていくべきか、今後も学び続け、「思索する身体」を益々鍛えていきたいと思っています。（昭和五十九年卒）

退職して思うこと

石井 宏明

私は、この三月をもって定年退職（役職定年）となりました。県教育行政をもって退職となりましたが、これまで、教友会の皆様をはじめ多くの皆様に多大な御支援をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

振り返れば、私は、埼玉大学教育学部在学時、教員になることが困難な時期でもあつて、教師になることを躊躇し、民間への就職も検討したことを覚えています。つまり、「何がなんでも教師になりたい」という思いではなく、「とにかく職に就ければ」という考えで自分の進路を考えていました。そんな私が、退職まで続けることができたのは、多くの方々の支えとともに、「教育」という、人が人を育てる営みに携わること、楽しさややりがいを感じ、没頭してきたからだと思えます。もちろん、辛いこと、苦しいこともありましたが、それらも含めて教職の魅力を感じていたように思います。

この四月より私は、県内私立大学の教員養成課程で教鞭をとらせていただいております。先日、教育実習を終えた学生がこんなことを言っていました。

「私、やっぱり先生を目指します。子供たちからたくさんエネルギーをもらいました。先生の仕事って大変だけどやってみたいです。」

この学生は、教育実習前は、教師か公務員かで自身の進路を迷っていた学生です。四週間の教育実習を通して、受入れ校の丁寧な指導もあり、子供たちとのかわりから教師の職の魅力を感じたものと考えます。この学生に、「先生の仕事って大変ですよ。」と敢えて聞いてみました。するとこの学生は、

「仕事が大変なのは、公務員でも民間でも同じです。」

私は、このような学生を一人でも多く増やしたいと考え、着任以来、学生には、教職の楽しいところ、大変なところを含めて自分の経験を伝えるようにしています。

現在、社会の変化が激しく、UCAの時代と言われるような予測不可能な社会の到来と言われています。学校教育においては、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善やいじめ問題、不登校への対応、教員不足、働き方改革、共生社会の実現に向けた教育の推進等々、課題は山積しています。

十年、二十年先の社会を見据え、子供たちが、将来、生き生きと、逞しく社会の中で活躍できるように、学校教育の果たす使命や責任は重大です。それを担うのは教師です。まさに、学校教育の成否を握るのは教師だと考えます。

今後、教員養成という立場から、微力ですが、恩返しのようなつもりで、学校教育を応援していきたいと考えています。（昭和六十一年卒）

学びの場の広がり

関口 泰広

私は今年度より埼玉県内の公立小学校で主幹教諭として勤務しています。大きなトラブルもなく職務を遂行できているのは、これまでの様々な「学び」が支えてくれているからだ実感しています。

私が学ぶために大切にしているのは、「新しい環境に身を置くこと」です。文献やメディアから情報を得ることが得意ではない私にとって、自然と情報が集まり、学びを得られる環境に身を置くことが自分を高める最適な方法であると大学時代に気付きました。そのきっかけをくれたのは専修で出会った友人や教育学部という環境でした。

転機が訪れたのは大学二年生のときでした。友人の紹介で何気なく参加したサークル活動が、非常に魅力的に映り、「自分も一緒に活動したい」と強く感じたことを覚えています。サークルに所属してからは、学びに満ちた日々を過ごしました。信念をもつ先輩方や仲間達から多くの刺激を受け、多様なコミュニケーションの在り方や生き方を学び、「人の熱意が地域を動かす」ということを知りました。

また、教員養成セミナーでの実習経験も、私の人生に大きな影響を与えました。特に、実習先の先生が示してくださった学級経営の方法や教育への熱意に心を打たれ

ました。その先生のもとでインターンを含め一年間学ぶ機会をいただき、子供達への愛情の注ぎ方を学びました。厳しさと優しさを兼ね備えた姿に憧れ、私もそのような教師になりたいと思いました。

大学三年生のときに所属した二宮裕之ゼミでは、同期や先輩方との交流を通じて、学び方や遊び方を知りました。この頃、先生に同行して多くの研究授業を見学する機会をいただきました。授業見学後に先輩と授業について語り合いながら食事をしたり、講義の合間に体育館でバスケットボールをしたりした時間は、今でも貴重な思い出として心に残っています。

教員としてのキャリアが始まってからも私の学びの場は広がり続けています。校外での学びを求め、町内の勉強会や県の研修会に参加するようになりました。特に昨年度までの十二年間、埼玉大学教育学部附属小学校で勤務する機会をいただいたことは何よりも大きな財産でした。先輩方や同僚に恵まれ、算数教育や学校運営について深く学ぶことができた経験は現在の教育実践の基盤となっています。

今、私の学びの場は県内から県外へと広がり、より多くのご縁に恵まれるようになりました。これからは新たな学びの場を求め、出合いを大切にしながら、自分自身を磨き続けていきたいと思っています。

(平成二十一年卒)

若さを武器にするために

道村 夏絵

私は現在、初任校の小学校で五年目の教員生活を送っています。三年間、特別支援教室の担当を経験し、昨年度から通常学級の担任となりました。

大学生から社会人になり、学校現場で諸先輩方から多くのことを学ぶ日々ですが、その中でも「若さは武器になる」という言葉をたくさん聞いてきました。教員になりたての頃は、若さ＝経験不足という認識で、その言葉の意味が自分の中に落とし込めずじまつたが、五年の経験の中で少しずつ理解できるようになりました。

誰でも初任の時は、指導力も乏しく授業も上手くいきません。それでも子供は、自分と年齢の近い若い先生の周りに自然と集まってくると思います。歳が近いからこそ親近感が湧きやすく、いつの間にか信頼関係ができていくのだと思います。「若さ」は子供と最初に信頼関係を築く上で、とても大きな役割を担っているのかもしれない。そのため、若さを武器にできるうちに、魅力ある授業ができるように、指導力の向上に努めたり、自分の感性を磨き子供との関わり方を学んだりすることが重要だと思います。

昨年初めて担任となり授業をしました。最初は全く上手くいきませんでした。それでも、子供達

と楽しく授業をするために、日々教材研究をし、子供から「授業が楽しかった」と感想をもらえたこともありました。子供の感覚は非常に鋭く、先生が一生懸命だと子供も一生懸命になります。経験豊富な先輩方のように授業で分かりやすく教えることができなくても、一生懸命に伝えようとしていると、子供も一生懸命理解しようとしてくれます。経験も技術もないからこそ、子供達と同じ温度感で授業を作り上げることができるとも、初任や若手教員の強みなのではないかと思っています。

ただ、若さはそれだけでは武器にならないこともあります。確かに信頼関係を築く上で大きな役割をもっているものだと思いますが、その信頼関係がいつまで続くかは、教員自身の努力次第なところもあるかと思っています。そのため、前述のように指導力の向上に努めること、さらに歳の近さを活かして、子供と「好き」を共有できるように自分の感性を磨くことも大切だと思います。子供が好きな遊び、アニメ、ゲームなどについて、教員自身も興味をもち、その文化に触れることで子供と関わる上での武器になります。

今大学で学び、教員を目指している皆さん、若さは武器になります。その武器が活かせる学校現場でいつか一緒に仕事ができることを楽しみにしています。

(令和二年卒)